

ねぎの今後の管理について

令和4年12月 大里農林振興センター

1 これまでの気象経過とねぎの生育経過

6月の平年を大幅に上回る高温と好天により、ネギハモグリバエやシロイチモジヨトウの発生が早くから見られ、10月まで被害が継続しました。

また7～9月は、豪雨や長雨の影響があり、高温・多湿等によるねぎの生育停滞や、ネダニ類、白絹病、軟腐病等の病害虫の発生が見られました。

収穫期を迎え忙しくなりますが、病害虫対策について今一度確認しましょう。

2 今後注意を要する病害虫と対策

(1) 黒腐菌核病・小菌核腐敗病

病原菌の発病適温（黒腐菌核病：10-20℃、小菌核腐敗病：5-15℃）となっています。薬剤での防除は予防主体となります。土寄せのタイミングにあわせ定期的に薬剤処理を行いましょう。

被害株に形成された菌核が次作の伝染源になるため、被害株や残さはほ場外に持ち出して処分します。

また、収穫機やトラクタに付着した土を他のほ場に持ち込まないように注意しましょう。

菌核は土中で数年間生き残るので、発生ほ場ではねぎの作付けを休み、土壤消毒、緑肥のすきこみ、輪作を行い、菌密度を下げましょう。



写真1 黒腐菌核病の発病株と菌核



写真2 小菌核腐敗病（葉鞘部が裂けた感染株）

表1 ねぎ生育期における黒腐菌核病防除の農薬処理例

作型	3~5月頃	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
年内～年明けどり	農薬処理① 育苗期後半～定植直前 パレード20フロアブル 苗箱灌注 又は その他薬剤	農薬処理② 9月中旬頃 土寄せ直前	農薬処理③ 10月下旬頃 土寄せ直前	農薬処理④ 12月中旬頃 土寄せ直前	農薬処理⑤ 2月 土寄せ直前			
年明け以降～2月どり								
3月以降どり								
初夏どり			約1か月～1か月半	約1か月～1か月半				
					農薬処理① 育苗期後半～定植直前 パレード20フロアブル 苗箱灌注 又は その他薬剤			農薬処理② 2月下旬～3月上旬頃 土寄せ直前

※農薬処理①のその他薬剤、②～⑤は「表2 薬剤例」を参考に選択してください

表2 黒腐菌核病・小菌核腐敗病の薬剤例（令和4年12月1日現在）

作用機 構分類	薬剤名	黒腐 菌核病	小菌核 腐敗病	使用回数	使用時期	使用方法
2(E3)	スミレックス水和剤	○	○	3回以内	収穫21日前まで	株元散布
3(G1)	モンガリット粒剤 ※1	○	○	3回以内	生育期(ただし、収穫14日前まで)	株元散布
7(C2)	アフェットフロアブル	○		2回以内	生育期(ただし、収穫14日前まで)	株元灌注
			○	2回以内	収穫前日まで	散布
	パレード20フロアブル ※2	○		1回	育苗期後半～定植当日	灌注(苗箱)
			○	○	3回以内	収穫前日まで
	カナメフロアブル	○		4回以内	収穫前日まで	株元散布
11(C3)	メジャーフロアブル	○		3回以内	収穫前日まで	散布
12(E2)	セイビアーフロアブル20	○	○	3回以内	収穫前日まで	散布

※1 冬季に定植する場合、モンガリット粒剤を定植後に使用すると生育が抑制される恐れがあるため、使用は避けてください

※2 パレード20フロアブルを育苗期後半～定植当日に苗箱灌注で使用した場合、生育期の散布可能回数は2回以内です

- ・農薬を使用する際は、必ず使用農薬のラベルを確認してください。
- ・同じ薬剤、同じFRACコードの薬剤の連用は避けましょう。
- ・周辺農作物への飛散に十分注意して散布を行ってください。

(2) ネギネクロバネキノコバエ (以下ネギネ)

ねぎを加害する幼虫が9月から12月にかけて気温の低下とともに活動が活発化しています。ネギネはねぎやにんじん、雑草などに寄生して地中で越冬し、約8℃以上で発育します。食害されると生育不良や他病害の発生を招く恐れがあるため、継続的な防除が必要です。

ネギネの好む環境を作らないようにし、ほ場への侵入を防ぎましょう。

【対策方法】

- ・明きょ等の排水対策をする (ネギネは多湿環境を好む)
- ・周辺作物の防除、除草を行う (ネギネの寄生場所を無くす)
- ・ねぎの残さ処理を行う (ネギネの発生源を無くす)

【ネギネの発生確認方法 (写真参照)】

ねぎの茎盤部や軟白部の一部が集中的に加害され、皮むけや泥汚れが見られます。怪しい被害株が見られたら当センターまでご連絡ください。

被害地域拡大中！
侵入に注意！



写真3 ネギネ幼虫



写真4～6 ネギネ幼虫による食害されたねぎ

3 病害虫を広げないために

ほ場のくずねぎや無造作に捨てた調整残さは菌核やネギネなどが生き残り、次作での発生源となり被害を拡大する恐れがあります。適切に処分しましょう。

また、ほ場周辺の除草作業を定期的に行い、雑草へ害虫を寄生させないようにしましょう。

- ・残さをほ場内に放置しない
- ・ほ場外に持ち出した残さは、1か所に積み上げてビニールシート等で覆う
- ・収穫後のほ場は速やかに耕うんし再生株を無くす
- ・残さやねぎをほ場にすきこむ場合には石灰窒素等を施用して腐熟を促進させる。

<ねぎ残さの腐熟促進>

(1)石灰窒素を使う場合、残さ 100kg あたり石灰窒素 1～2kg を目安に投入しましょう
収穫せずにほ場にすきこむ際は、10a あたり 60kg を上限に散布・耕うんして腐熟させます。散布量はねぎの量に合わせて調整してください

(2)微生物分解資材を使用した場合にも、残さの腐熟促進が期待できます

※資材例「酵素でくさーる」 処理目安 10a あたり 3～4 袋

収穫後のネギネクロバネキノコバエ対策

令和5年1月 大里農林振興センター

深谷市内のねぎで、ネギネクロバネキノコバエ（以下ネギネ）の被害が散見されています。ネギネ幼虫はねぎの鮮度のある部位（軟白部・莖盤部）に寄生するため、ほ場にねぎを収穫せずに残したり、生の残さ（くずねぎ等）を放置して再び根付くと、そこで生息・越冬し、次作の発生源になる恐れがあります。

収穫後は残さを適切に処理し、害虫をほ場に残さないようにしましょう！

1 こんな畑に注意！



ねぎ畑の耕うん後に根付いた再生株



残さが畑にそのまま放置されている



ネギネの寄生場所として、
越冬や増殖・被害地域の拡大
につながる恐れがあります。



ネギネクロバネキノコバエの食害の様子

2 ねぎの残さ処理（残さの腐熟促進）

（1）被害が無い場合

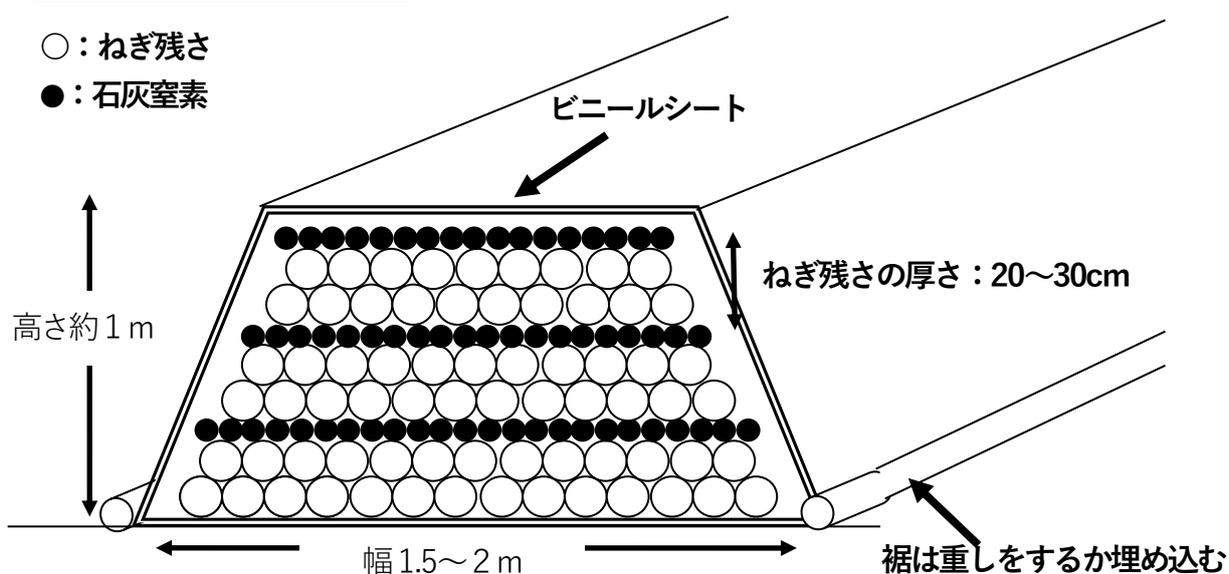
被害が確認されていないほ場についても、収穫が終わったら速やかに耕うんし、再生株を無くしましょう。また、出荷調製後の残さは、下記の手法を参考に早めに腐熟させて適切に処理しましょう。

(2) ネギネ幼虫の被害があった場合

【石灰窒素を活用する方法】

出荷調製後の残さや被害株を捨てる時には、石灰窒素を加え速やかに腐熟させます。下図の例を参考に、残さの上から必ずビニールシート等で被覆密閉し、周囲に飛散させないようにします。

被覆密閉する場合の一例



注意! 石灰窒素、殺菌剤との同時使用は避けること!

作業の手順

- ① 残さを20~30cm積むごとに、石灰窒素を散布する。
(残さ100kgに石灰窒素1~2kg程度)
- ② 手で絞って、水がにじむ程度の水分になるように上から散水する。
- ③ 透明のビニール等で全体を覆う。



ほ場にねぎの残さを集めビニールで覆った様子

【収穫せずほ場にすき込む場合】

石灰窒素を **10aあたり60kgを上限**に散布・耕うんし腐熟させます。
散布量は、ほ場に残ったねぎの量に合わせて調整します。

【微生物分解資材を活用する方法】

有機物分解能力を持つ微生物資材を活用し、ねぎ残さを早く分解させます。

資材例 酵素でくさーる（処理目安：3～4袋/10a）

バチルス菌などの強力な有機物分解酵素を生み出す微生物群が、1g 当たり 1 億個以上生きて含まれています。複数の分解酵素の力により、短期間で有機物を分解できます。野菜残さの他、稲わらなどの分解促進や緑肥の腐熟促進、堆肥の発酵促進にも効果があります。

効力安定のため、殺菌剤の使用は施用後 2 週間程度を目安に行いましょう。

【土壌くん蒸剤を活用する方法】

集積した残さに寄生したネギネを殺虫して、増殖を防ぎます。

資材例 キルパー（使用量：原液で 40mL/m²）

ほ場内に集積した残さ物に所定量の薬液を散布して、被覆します。被覆期間の目安は 3～7 日です。使用に当たっては、注意事項・使用方法をよく確認しましょう。散布後には必ず被覆しましょう。

※在庫など、購入に当たっては農協等にお問い合わせください。

ゴーグル、マスク、手袋を着用しましょう！



2 その他

（1）ほ場の周辺作物や雑草管理の徹底

ネギネはねぎ・にんじん以外の作物や雑草にも寄生し、発生源となります（特にキク科の雑草に寄生する）。

周辺作物の薬剤防除や除草作業を定期的に行うなど、ほ場を清潔に保ち害虫の発生源を断ちましょう。

（2）排水対策

ネギネの幼虫は多湿条件を好みます。生育期間には、ほ場に水が溜まらないように明きよなどを設置します。収穫が終了しほ場が空いている時期には、土壌改良資材などを上手に活用し、ほ場環境を整えましょう。

使用した機械等（トラクタや管理機のタイヤやロータリ等）は、移動の際に必ず土をよく落として、他のほ場へのネギネ等の持ち込みを防ぎましょう。

